国際親善ニュース

第　7　号
昭和56年３月31日発行
金沢市都市提携委員会
事務局：金沢市総務部総務課
国際親善係　ＴＥＬ．20－2075

中国・蘇州市―６番目の姉妹都市に！

○中国・蘇州市との都市提携が決定

一昨年３月、蘇州市との友好都市提携が話題となり、訪中諸団体が申し入れを重ねて丸２年。この２月初め、同市から書簡で中国政府が両市の都市提携について正式に決定を下したと連絡があった。これは大阪府池田市と同時に友好都市になることが決まったもので、思えば、和歌山、岡山、宮崎など12都市が蘇州に〝熱い想い〟を寄せ、それぞれが猛烈にアタックした結果、両市がこれらのライバルをくだして〝結婚〟にこぎつけたものである。市では早速調印の下準備のため、２月中旬に山田総務部長ほか２名の先遣団を蘇州市とその上部機関の江蘇省南京市へ派遣した。その結果、百万石祭の前後６月12日から17日まで７名～10名の蘇州市友好代表団が本市を訪問し、提携調印を行うことが決まった。また、今後の交流は息の長い子々孫々、世々代々に及ぶ無理のないものにすることが取り決められ、具体的には、相互で写真展の開催、農業研修生の本市受入れ、児童書画の作品交換などである。（**写真**は、蘇州市内風景）

○新イルクーツク市長が来沢

昨年11月28日から12月５日まで本市の招待でバーベル・グロモビッチ市長と心臓病の専門医チェウソフ医師の２名が来沢、グロモビッチ市長は、昨年１月退任のサラツキー前市長の後任として３月にイルクーツク市長に就任したばかりで、これが初来日。一行は28日新潟空港着、翌29日午前金沢入り、市庁舎前で市議会議員、市幹部の出迎えを受け、引き続き市長室で江川市長、尾戸助役らと堅い握手を交し、両市の友好交流について歓談した。30日は江川市長の案内で神社仏閣、兼六園など市内観光、市立図書館、西部清掃工場、西部市民体育館を視察した。12月１日は県知事、森根上町長、北国新聞社を訪問、北陸放送ではテレポート６に出演した。２日は高岡中学校の教育施設を見学、県立中央病院ではチェウソフ医師が旺盛に医療機器等を観察した。同夕、市民歓迎パーティに臨み、イルクーツクを訪れた市民らと交歓交流した。翌３日、４日と東京を見学、５日新潟から空路帰国した。（**写真**は、握手を交す両市長等）

○江川市長がナンシー、ゲント親善訪問

江川市長一行は、昨年４月15日から19日まで、ナンシー、ゲントの両市を親善訪問した。15日まずナンシー入りした江川市長一行は、同市庁舎でクロード・クウレ市長らと会見し、盛んな歓迎を受けた。この会見でロレーヌ・フロラリーへの生け花関係者の派遣など、盛りだくさんの交流計画が決定した。ナンシーの経済界からは両市の経済交流の強化充実を望む意見が出され江川市長はこれに対し商工会議所間の使節団の交換等を提案した。17日には江川市長自ら市内商店街の日本風飾り付けコンクールを審査しナンシーでの日程を終えた。またゲント市へは17日夕に到着し、18日から同市で始まった国際フラワー・ショーの開会式に招待客として出席した。ゲントのフラワー・ショーは５年に１度開かれている大掛かりな花の祭典で、同ショーの開会式はボードアン国王夫妻臨席のもとに行われた。18日で両市の訪問日程を終えた江川市長らは、22日米国繊維展示会に出席し、26日帰国した。（**写真**は飾り付けコンクール成績発表風景）

多彩な「市民対市民」交流

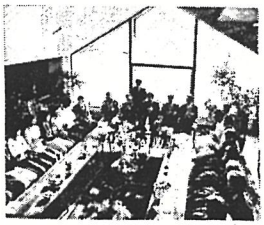
○神川、米田両市議がバファロ、ボルトアレグレ訪問

本市議会議員の神川利男、米田正一の両氏は、10月17日にバファロに到着した。空港でバファロ姉妹都市委員会のクーパー会長らの盛大な出迎えをうけた両氏は翌18日にはナイアガラの滝や市内の施設を視察した。同日夕、姉妹都市委員会主催のレセプションに招かれ、委員らと交流し、意見交換などを行った。両氏は19日にバファロを発ち、21日には第２の訪問地ボルトアレグレに到着した。同市では、市当局と日本総領事館の行き届いた手配により両氏は折から本会議の開催されている議会を訪問、市会議員と大いに親善交歓を行った。また、昭和46年当時のトンプソン市長と金沢を訪問したカーザ市議会議員（当時市広報課長）が特に両氏を歓迎、金沢の話に花が咲いた。神川、米田両議員は同日夕市主催の歓迎夕食会に招かれ、今後の両市の交流について話合った。（**写真**は、ボ市主催の夕食会での一こま）

○ナンシーのオルガン奏者が金沢で演奏会

昨年５月14日、ナンシー市のロベール・ロージエ氏によるオルガン演奏会が金沢市の北陸学院栄光館において催された。同氏はナンシーのコンセルバトワールおよびパリのスコラカントルムの出身で同校をすばらしい成績で卒業。その後イタリアのビオッティー国際音楽コンクールで国際賞を受賞するなど輝かしい経歴の持ち主で、現在ナンシーの聖フィアクル教会のオルガン奏者をつとめている。今回の金沢での演奏会では、モーツァルト、バッハなどの馴染み深い作曲家の作品をはじめ、ヴィエルヌ、ラングレといった新しい作曲家の作品に至るまで、変化に富んだプログラムで、洗練された美しい調べを披露した。金沢にはあいにくパイプオルガンを備えた会場がないため、栄光館の電子オルガンによる演奏となったが、詰めかけた音楽愛好家を前にオルガン音楽に対する理解を深めてもらおうと、一曲ごとに自ら解説を加える熱心さで盛んな拍手をあびた。最後にロージェ氏が得意とする即興曲を演奏し聴衆を魅了した。

○イルクーツクへ陸上競技代表団派遣



昨年９月25日から10月２日までイルクーツク市の招請で、山田稔市総務部長を団長に、石野邑一市議会総務常任委員長ら一行３名の市役所代表団、土用下和宏市陸上競技協会長を団長に、監督、コーチ、選手（男子７名、女子５名）一行15名の市選抜陸上競技選手団が同市を訪問した。26日深夜、グロモビッチ市長はじめ53年に来沢の陸上競技団選手多数の出迎えを受けて空路イルクーツク入り。９月27日午後３時、千人余の観衆が見守る中、トルート中央スタジアムで姉妹都市イルクーツク・金沢陸上競技大会が開始された。トラック競技は男子５、女子４種目。フィールド競技は男子３、女子２種目。砲丸投げでは、加藤剛紀選手が自己保持県記録14M28を上回る14M62で優勝。しかし、イルクーツク市側には、モスクワ五輪女子1600Mで金メダルを獲得したゴイシク選手や棒高跳びで銀メダルを取ったボルコフ選手が入っており、金沢チームの奮戦むなしく、総合得点85対48で敗れた。滞在中、一行はバイカル湖遊覧、スポーツマンどうしの交歓をし、郷土誌博物館、鉱物博物館、水力発電所を見学した。10月１日夜、イルクーツク空港を飛び立ち、２日ハバロフスク経由にて帰国した。（**写真**は、両陸上競技チームの交歓）

○金沢市文化使節団がロレーヌ・フロラリーに参加

金沢市文化使節団（団長・桑田良夫金沢市教育長）は、ナンシー市で開かれた花の展覧会「ロレーヌ・フロラリー」に昨年11月５日から同８日まで参加し、日本の生け花を紹介した。さきに江川市長がナンシーを訪問した際、ナンシー市からこのフロラリーへの参加要請を受け、今回の派遣が実現した。この「ロレーヌ・フロラリー」は、ナンシー市のあるフランスのロレーヌ地方の主要都市で行われ、その地方の都市や園芸家が色とりどりの花のデコレーションを展示する花の祭典である。このフロラリーは11月11日までナンシー国際見本市会場で開かれ、兼六園をテーマに選んだ金沢市の一行は、雪つりの美を表現した大作を中心に、現地の花器や花材を用いたものや日本の花器を用いたものなど多数の作品を展示した。この使節団の世話役として、池田日仏協会事務局長は「日本の生け花のシンプルな美しさがナンシーの皆さんにアピールし、友好親善の大役を果せて嬉しい」と感想を述べた。（**写真**は、会場での一行）

○ナンシーからクラン嬢が留学

ナンシーからの交換留学生フランソワーズ・クランさんが昨年７月２日金沢に到着した。翌３日午前江川市長を表敬訪問したクランさんは長旅の疲れもみせず「前の留学生ドミニックさんから金沢について種々聞いてきました。金沢のすぐれた伝統技術をマスターしたい」と意欲的なところを見せた。これに対し江川市長は「フランスと日本とでは食生活や習慣の違いがあり大変でしょうが、がんばって下さい」と励ました。クランさんはナンシー市郊外ジャルヴィル在住で、ナンシー美術学校で彫刻を勉強している学生。現在金沢美術工芸大学に聴講生として籍を置き、工芸デザインの鋳金クラスで勉強に励んでいる。金沢に来た当初は日本の家庭生活を経験するため鈴見台の宮竹さん宅に下宿していたが、日本の生活や文化に大変興味を持っているクランさんは現在金沢の生活にもすっかり慣れ、市内のアパートで暮らしている。日本通の彼女はさしみ以外なら日本食は何でも大好きで、日本酒も併せて楽しんでいる様子。この金沢市とナンシー市との交換留学生制度は昭和49年以来続いており、ナンシーからの留学生はクランさんで４人目である。

○第６回姉妹都市フェア開催

本会の主催、北国新聞社、北陸放送の共催による恒例の金沢姉妹都市フェアが名鉄丸越百貨店を会場に、10月10日から15日まで開催された。10日午前10時から金沢在住の外国人留学生らがゲストとして招かれ、国際色豊かにオープニングが行われた。また、ＰＬマーチングバトントワラーズ50名と県警音楽隊35名が参加して、市役所から名鉄丸越までの間賑やかに市中音楽パレードも行われた。今回のフェアは第６回目にあたり、〝心で結ぶ姉妹都市〟をメイン・テーマに、江川市長のナンシー、ゲント訪問コーナーなどここ数年姉妹都市を訪れた個人やグループの交歓風景などの写真パネルのほか姉妹都市から本市に留学中のクラン嬢、ターノフ氏（バファロ）一家の金沢での生活ぶりを紹介するパネルなども展示された。また、「日本と日本の人々」と題して姉妹都市から送られた多くの児童画も展示され、大いに人気を博した。（**写真**は、フェアの会場）

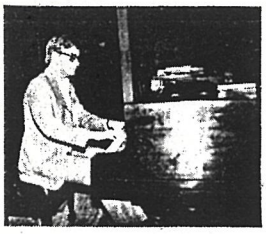
○バファロから訪問団来訪

バファロ・ロータリークラブ会長のキャスティング氏とヘンゲラー百貨店のマーフィー社長を団長とする21名のバファロ親善訪問団が来訪した。バファロからの大型訪問団としては昭和52年以来のもので、実業家、医師、写真家のほか年配の婦人が多かった。一行は10月23日に金沢入りし、直ちに江川市長を訪問、次いでヘンゲラー社と提携している大和百貨店に宮社長を訪ねた。翌24日は市内見学、ロータリークラブ例会出席のあと本会主催の市民歓迎パーティーに臨み、市民各層と親善交歓を行い、終了後、一行は10組のホストファミリーに引き渡され、3時間の家庭訪問を楽しんだ。訪問団は26日早朝バスで福井へ発った。（写真は、野牛像前での一行）

○在大阪ベルギー総領事一家来沢

昨年8月3日から5日の3日間、在大阪ベルギー総領事エドモン・ドゥ・ウィルド一家が金沢市を訪問した。総領事の来訪はベルギー青少年代表団32名の金沢訪問に合わせて金沢ロータリー・クラブが招請し実現したもので、夫人のリーヴァさん、長男エリック君、長女イングリッドちゃんを伴っての訪問となった。総領事夫妻は2人ともゲント大学の出身で、ゲントの姉妹都市金沢を訪問したいという前からの希望が叶ったかたちとなった。ドゥ・ウィルド総領事は1938年ゲント市で生まれ、1969年外務省入省後、在ブレンディ共和国、在チュニジア共和国大使館の次官を歴任し、1978年9月から在大阪ベルギー総領事として赴任した。金沢滞在中、市長、知事表敬訪問、ベルギー庭園での植樹、市内見学などをし、4日夕県市主催歓迎パーティーに出席。同パーティーで、さきのベルギー青少年代表団と共に金沢市民と交歓のひとときを持った。

○市民文化祭でナンシーのピアニストが演奏



昨年10月29、30の両日、金沢市観光会館において市民文化祭の行事の一として、ナンシー市出身の新進ピアニスト、ベルトラン・モーリア氏(24)のリサイタルが開かれた。モーリア氏は5歳のときからピアノを始め、パリ・コンセルバトワールのピアノおよび室内楽のクラスを優秀な成績で卒業し、19歳でルドルフ・ゼルキンの推薦により、マールボロ音楽祭（アメリカ）に参加し好評を博し、以後世界各国においてめざましい活躍を続けている。29日午後は、中学生のための演奏会が開かれ、音楽の教科書にとりあげられている名曲の数々が演奏された。30日の一般向け演奏会では美しいフランス音楽が披露された。（写真は、ピアノに向かうモーリア氏）

○石川青年の翼一行がゲント訪問

'80石川青年の翼の一行は昨年11月7日ゲント市を訪問した。7日午後パリからゲント入りした一行は、カント城、ギルド・ハウスなど古い街並や歴史的な建造物を見学した後、ゲント市役所を表敬訪問した。ゲント市役所では、モルティエール助役や姉妹都市担当のヴァン・ウェズマール氏らにシャンペンの乾杯で迎えられ、公式行事のあと一行は、午後7時からゲント市の若者達を招き、交歓会を催した。同交歓会では、さきのモルティエール助役らゲント市関係者や、招待したゲントの青少年らと、夜が更けるまで楽しく有意義な語らいが続けられ、互いに理解を深めた。忘れられぬ思い出を残し、一行は翌8日アムステルダムに向けてゲントを発った。

○石川敬老の翼がバファロ訪問

県レクリエーション協会小津理事長を団長とする「石川敬老の翼」120名のお年寄りが9月18日から20日までバファロを訪問した。これは同協会が主催したハワイ、ゲント、西海岸に次ぐ4度目のユニークな企画である。18日夕バファロのホテルに着いた一行を姉妹都市委員会のクーパー会長らが出迎えた。19日にナイアガラや市内見学を終えた一行は、ホテルにクーパー氏や同市の日本人会の面々10名、お年寄りのボランティア関係者10名らを招いて交歓会を開催した。席上、両市のお年寄りの間でいろいろ意見交換がされ、有意義なひとときを過した。（写真は、記念品を贈られるクーパー会長）

○蘇州・金沢促進委員会設立と特使派遣（55・1～4）

昨年1月29日に商工会議所会頭、国貿促北陸支局会長、県・市日中友好協会長らが発起人となって、蘇州・金沢懇話会が開かれ、両市の友好都市提携の一層の促進のための委員会を設立することが決められた。これをうけて発起人会名で日中友好諸団体をはじめ県・市、経済界、教育界、労働界など各界の27団体に参画を呼びかけ、2月6日設立総会が開催された。委員会は正式に「蘇州・金沢友好都市提携促進委員会」と称し、会長には県日中友好協会の徳田会長が、副会長には日中友好金沢市議員連盟会長の室井氏と市日中友好協会長の渋谷氏がそれぞれ選出され、併せて規約が承認され、今後の活動方針として3月までに2、3人の特使を中国に派遣することなどが決定した。徳田会長と室井副会長は4月10日から17日まで訪中、各関係機関を訪ねて両市の友好都市提携の早期実現方を要請した。

○江蘇省人民政府外事弁公室主任ら来訪（55・6）

昨年6月27日、江蘇省人民政府外事弁公室主任の汪良氏、蘇州市革命委員会副主任の張従先氏ほか2名の友好代表団が来訪した。汪氏の来日の目的は江蘇省と愛知県の友好省・県の調印準備のためで、同氏は文字通り江蘇省の外事業務の最高責任者の地位にあって、蘇州と金沢の友好都市提携についても決裁し、中央政府へ上申するという重要な任務を帯びていた。28日には、知事、市長を表敬訪問し、兼六園などを見学したあと、昼食会で市長や日中関係者らと両市提携について大いに話合った。午後は、市内の3つの紡績工場等を精力的に視察した。同日夕市主催の歓迎パーティーで汪氏らは本市の日中友好関係者50名と懇談した。このあと市の幹部と打合せに入り、都市建設使節団や伝統工芸視察団の派遣など初めて中国側から具体的交流計画が提案された。（写真は、市役所で江川市長らと歓談する汪氏ら一行）

○中日友好協会孫平化副会長来沢（55・9）

昨年9月20日の日中友好協会全国本部創立30周年記念祝賀大会に同協会が招いた中日友好協会代表団の副団長孫平化氏（中日友好協会副会長）は、蘇州・金沢友好都市提携の問題について政府筋でカギを握るＶＩＰのひとりだけに、本市の日中関係者などの強い要望により、中日友好協会の職員4名とともに同月28日に来沢した。東京工大出身の孫氏は金沢滞在中はほとんど達者な日本語で通し、同日夕の歓迎会で、蘇州と金沢の見通しについて聞かれると、「両市は既に結婚したのも同然で、そうあわてなくてもよいのでは」と答えた。一行は翌29日の早朝金沢を離れた。

※※※プロフィール※※※

ナンシーからの交換留学生フランソワーズ・クランさん（金沢美術工芸大学聴講生）

1958年　フランス、サルブール生まれ。
1977年　ナンシー、アンリーボワンカレ国立高等中学校卒。
1977年　ナンシー美術学校入学。
1980年　7月、金沢美術工芸大学聴講生として来訪。

金沢への留学を希望した理由を尋ねると、「はっきりとは言えませんが……」と静かに答える素敵なマドモワゼル、クランさんがナンシーから４人目の交換留学生として昨年７月金沢にやってきた。彼女の答えは「日本へ旅行してみたかったから、そして日本に漠然と興味を持ったから。でも今までに日本に関する本を読んだことはありません」と続く。母かたのおばあさんが日本人だというクランさんが日本に興味を持つのもうなずけることで、彼女自身も「日本人の血のせいかしら」と笑ってみせる。金沢美大とナンシー美術学校との違いを語ってもらうと「自由という点が完全に違っています。５年制のナンシー美術学校では最初の２年間は週42時間授業で、みっちり学課を勉強しますが、残りの３年間は自由に制作に取り組みます。でも金沢美大には伝統工芸の技術を学ぶためのクラスが多くとてもうらやましい」と伝統工芸に対する興味ものぞかせる。ナンシー美術学校卒業後も彫刻を続けたい彼女は、とにかく彫刻関係の職業に就きたい様子。金沢・ナンシー間の交流プログラムについては「相互理解を深めるためには交流の機会が多ければ多いほど良いと思います。その交流の一として金沢・ナンシー間の交換留学生制度は重要なものではないでしょうか。そして留学期間はもっと長くてもよいのでは……」と素直に答える。再度日本留学を希望する彼女に結婚について尋ねると、「今は結婚より彫刻、鋳金に興味があるの」とさわやかに話してくれた。

○イルクーツクの〝兼六園クラブ〟について

昨年４月11日、ノーボスチ通信社東京支局（ＡＰＮ）を通じて、グロモビッチ市長は就任に当って本市民に抱負と近況を伝える中で、「兼六園クラブ」の設立を知らせてきた。同クラブの事務局長を務めるのは、ＡＰＮの記者で若くてハンサムな日本語の達者なウラジーミル・ウラソフさん。同氏からのテレックスによれば活動内容は次のとおり。会員40名以上。金沢を紹介する姉妹都市交流促進部会も設置されている。日本の文学、歴史、芸術、経済、伝統芸能、スポーツ等の学習と紹介普及。特に空手がブームとか。本年２月の最新情報では金沢デーを開催し、茶会の席上、短歌や俳句や現代詩を朗読したり、井上靖著「おろしあ国酔夢譚」を通して日露交渉史の研究を始めたことを伝えている。生け花展は、48年の石川の船一行の同地訪問以来、伝統行事になっている。また、日本語学習熱も大変なもので現代日本文学全集を入手したい希望も届いている。金沢を愛する兼六園クラブの誕生で、今後の交流はますますバラエティーに富むものと思われる。（**写真**は、生け花の練習をする会員達）

○都市提携委員会臨時総会開催、吉田新会長を選出

本年３月23日市役所で20名の委員の出席を得て、金沢市都市提携委員会臨時総会が開かれた。従来から蘇州に関する案件については、蘇州・金沢促進委員会で審議されてきたものであるが、同市との都市提携が決定したので同委員会は事実上３月初めの総会で発展的に解散したことに伴い、本川・日中友好市議員連盟会長と渋谷・市日中友好協会会長を新たに都市提携委員会委員として加え、臨時総会が招集されたものである。江川市長のあいさつに次いで、上記２名の新委員が紹介されたあと、会長辞職の願い出のあった村中会長の後任として市議会議長の吉田勉氏＝**写真**＝が選出された。早速、吉田新会長のもとで議事に入り、蘇州市との経緯について事務局から報告のあと、蘇州市代表団の歓迎日程案、議定書案ならびに昭和56年度交流計画案が示され、いずれも原案どおり承認された。

○蘇州市を訪問して

金沢市総務部長　　山田　　稔

２月初め蘇州市から、「金沢との友好都市提携について中国政府のＯＫが出た。先遣団を派遣していただきたい」との知らせがあり、直ちに蘇州・金沢促進委員会が招集され、そこで私は団長として訪中することを命ぜられた。実にあわただしく、バタバタと数日後には市会議員の甚田さんと県日中友好協会の東さんと３人で、大阪空港で池田市の先遣団と落ち合い、機上の人となったのである。それは２月14日のことであった。私は台湾生れだが、中国本土へはこれが初めてのことなので、あれやこれやと思いを馳せているうちにもう上海に着いてしまった。空港には、わざわざ蘇州から周鴻酋さん、呉少煖さんが出迎えてくださり、差し向けられた車で蘇州へ出発した。３時間余りで日のとっぷり暮れた蘇州に到着した我々は市人民政府へ案内され、方明市長に表敬した。どっしりと恰幅のよい、重厚な人柄の中にも優しさをたたえた市長は「遠いところからご苦労さまでした。両市の友好の発展のためにじっくり話合いましょう」とねぎらった。翌15日の午前中は、４大名園のひとつ留園、「月落ち烏啼いて霜天に満つ…」で有名な寒山寺、そして虎丘を２時間で見学した。庭園に配された石がとにかく珍らしい奇岩、怪石の類いで、日本庭園とはその趣を全く異にする。午後からはいよいよ〝会談〟に入った。昨年来沢された江蘇省外事弁公室主任の汪良さんが、「方明市長は就任早々であり、当分出国出来ないので、４月初めに日本側から訪中して調印をすることでいかがか」と言うので私も池田市も困ってしまった。池田市は、時期はそれでいいがどうしても訪日してほしいと言うし、私は、４月初めは市長が出国出来ない繁忙な時期だし、金沢としても訪日して調印を、と主張したので３市３様の都合でなかなか日程が噛み合わない。16日も17日も会談が延々と続き、蘇州だけで16時間余りが費された。議定書のことや今後の交流計画などはスムーズに話合いがなされたのだが肝心の調印の日と場所が決まらず、18日に南京へ移動してやっと江蘇省省長の恵浴宇さんから、「それでは、６月に訪日して調印をしましょう」と断が下され、ようやく金沢で調印というところにこぎつけたのであった。南京での会談と併せ通算して実に20時間半も会談に明け暮れたわけで、私はこれが４度目の海外旅行であったが、日頃から身体強健を自認する私でもこんなに疲れたことはなかった。こういうわけで蘇州では２時間程度観光に出ただけなので、蘇州がどんな町なのか感想を聞かれても、正直言って、うまく答えられないのである。だが、ひとつふたつと思い起してみると、蘇州は文化的な香りが高く、人々の暮し向きもよく、上品な町である。中国の人は友好のあらわれ、最大のもてなしとして会談中であれ、宴会中であれ、とにかくタバコをよく勧める。また、淹したお茶はケチだというので、茶碗の中にお茶っ葉を直接入れたものを何杯でもおかわりを勧める。蘇州あたりの中国料理は江浙料理と言われ、甘味が非常に強く、辛党の私は少々閉口した。さて、今は友好都市提携先遣団団長として訪中し、重要な任務を全うしたことでホッとしているところである。来たる６月の調印が待ち遠しい。

○編　集　後　記

６月の蘇州と金沢の調印準備で忙しい毎日であるが、中国でひとつ思い出した。昨年の姉妹都市フェアに各姉妹都市から送られた「日本と日本人」と題する児童画をみて、びっくりし、残念にも思った。それらは「中国と中国人」そのものだった。子供の絵だが、発想の点では大人も子供もそう差はない。一般の外国人から見た日本人なんてこの程度の理解なのだろうか。言い尽くされているが、国際理解とは実に難しいものである。